

ゲッセマネの祈り

鈴木英昭

マタイとマルコはそれぞれの福音書にゲッセマネという場所の名を記している。そこは主イエスが弟子たちをともなって祈るためにしばしば行かれた場所であり（ルカ22：39）、逮捕を前にしたこの時も、ここでなされた主イエスの祈りの内容を共観福音書はそれぞれ記していて、キリスト教会では、一般にゲッセマネの祈りと呼んできた。ゲッセマネとはヘブライ語・アラム語で油絞りを意味し、オリーブ山のこの場所がそれに適し、また実際に行われていたものと思われる。

主がここでなさった祈りについて、なかでもルカが記しているもっとも短い記述を中心にして理解することにする。彼はこう記した。

「それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、『誘惑に陥らないように、祈っていなさい』と言わされた。そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。

『父よ、みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血のしづくのように地に落ちた。イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来てみると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。それで、彼らに言われ

た。『なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい』（新改訳ルカ22：39～46）。

主イエスはその公生涯のほとんどの場合、弟子たちを伴って行動され、時にはペトロ、ヤコブ、そしてヨハネの三人の弟子たちだけを連れていかれ、彼らにご自分の行動を見せ、その語られた言葉を聞くことができるようになされた。このゲッセマネの祈りの時もそうであり、このイエスの祈りの言葉を見てわかるように、弟子たちはイエスの祈りの意味を最初は理解できなかつたであろう。

しかし、この祈りを理解し、この祈りがもっている価値を知り、それによってわれわれ信仰者の祈りが豊かになれば幸いである。主イエスは、こうした危機的なときに、ご自分の祈りの鍛錬をなさり、また、弟子たちにも理解を与えて、備えをなさろうとされたことを知ることは、後の時代のわれわれのような信仰者の祈りにとっても、きわめて有益である。

そのために次のような問い合わせを設けて考えることにする。

- 1) なぜ主イエスが「苦しみもだえられた」のか。マタイも、主が「悲しみもだえ始められた」（26：37）と記しているが、それはどのような悲しみであり、また苦しみを意味していたのか。
- 2) 主イエスは、弟子たちと同じ場所で共に祈られたのではなく、「弟子たちから石を投げて届くほどのところに離れて」、祈られた。そのことは、どのような意味をもっているのか。
- 3) 「御使いが天からイエスに現れ、力づけた」ということは、主イエスにどのような助けを与えることが目的であったのか。

I. 設問への回答

- 1) 悲しみ、苦しみもだえられた

われわれキリスト者であっても、未経験なものへの不安を抱くことがある

し、死別は一般に悲しいものである。しかし同時に、キリスト者にとって死がある種の慰めとなることも事実である。それは時間的に肉体の死が、永遠の祝福に比べて、直ちに過ぎ去ることからくる慰めである。死は永遠の祝福に移されていくために通過する入口であることを知っていることは慰めである。また、キリスト者にとって、死が与える悲しみや苦しみの程度は、直ちに与えられる栄光の重さに比べて、軽いものであることを知っているため、信仰者は死の重圧から解放される。

キリスト信者以上にこのことを完全にわきまえておられた主イエスが、聖書に記されているように、悲しまれ、苦しまれたということを、どのように考えたらよいのか、という問いをもつのは不合理なことではない。よく引き合いに出されるように、異教徒のなかには死に直面して、それを平静に克服したと思われる人々の実例が挙げられる。例えば、ソクラテスの死もそのひとつであるし、日本の歴史にも家のため、国のために殉じた実例は多くある。そうしたことと比較してみると、このゲッセマネの園で主イエスが悲しまれ、苦しまれた事実が、かえってつまずきと思う人々がいるかもしれない。

そうであればなおのこと、これらの福音書の記者たちが何の躊躇もなくこのように、主の悲しみや苦しみを記しているからには、その意味を知っておく必要がある。

その理解の鍵は、神に対する人の罪の贖いのために、靈肉両面の死の刑を受けなければならず、永遠からの御父と御子の交わりを一時的にせよ断たれることにある。この世で生を与えられている人は、神からの一般的な恩恵のために、神との交わりを断たれる経験がないために、理解ができないとしても、主イエスはその時が迫っていることを知っておられた。その知識はわれわれのように時間、場所、そして能力の制限のない主イエスにとって、それらを剥奪されることがどんなに恐るべきものであるかを知っておられた。それがこうした深い悲しみとなって現れたものと考えることができる。

しかし、死に直面して、「主がこうして苦悩されることがなかったなら、われわれの仲保者ではない」¹。そのため、むしろわれわれは、このキリスト

がその悲しみや苦しみを明らかにしてくださったことが、仲保者としての確かな証しを見るのである。

われわれは、主がそれまで何度もその身に起こることを弟子たちに予告してこられたことを知っている。そのことを考えれば、主が弟子の裏切りをはじめ、ご自分の身に起こることを単に予知しておられたことが苦しみの原因になったと考えることはできない。まして、外部から加えられる不当な策略や、仕打ちが主を苦しめたことの中心ではない。そうなると、やはり主の苦悩の原因は父なる神から来る苦悩である。御父から与えられていたものがどこおり、停止され始めたことからくる苦悩である。その苦悩が頂点に達した時、十字架の上の叫びとなった。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。

2) 弟子たちから石を投げてとどくところに離れて祈られた

ゲッセマネの園で主イエスは十一人の弟子たちに向かい、そこから見える場所を指して、ご自分は「あそこへ行って祈っている」(マタイ 26:36、マルコ 14:32) と言われ、彼らと共に祈ることを意図されなかつたが、それでも公的な使命をもつご自分として、このようにその使命を果たすために祈ることを強調されたと考えられる。そこで、ペトロとゼベダイの二人の子らを連れて先へ進まれた。三人にはいつもの場所で祈っているように命じた上で、ご自分は彼ら三人から「石を投げて届くほどの所に離れて」(ルカ 22:41)、ひざまずいて祈られた。

この「石を投げて届くほどのところ」という距離は、どの程度のものなのであろうか。石を投げるといつても、遠投のために投げるような距離ではなく、畑を耕していく鍬に当たった石を拾い上げて畑の外に投げるような場合のことを考えればよい。15 メートル前後の距離であろうと言われる。「切に祈られた」祈りの声が大きくなつて、静かな園ではご自分の祈りが聞かれる事を願つておられたとすれば、この程度の距離は遠すぎることもなければ、近すぎて祈りが妨げられるようなものでもないからである。

主イエスが祈るために弟子たちからこのように離れたことは、少なくとも

¹ K. Schilder, *Christ In His Suffering*, (Klock&Klock, 1938), p303.

二つのことをわれわれに考えさせてくれる。

その一つは、このゲッセマネの祈りの場に十一人の弟子たちだけを連れてこられたことについてである。イエスがそのようになさったのは、ご自分が仲保者としての役割を、これから公的に果たすためのクライマックスが近づいていたとき、そのことを十一弟子たちに意識させるためであり、また彼らのとりなしを受けて、御父に祈ることを願っておられたからであろう。つまり、このゲッセマネの祈りは、ご自分が仲保者として役割を公的に果たしつつあることを弟子たちに再び確信させ、とりわけ三人の弟子たちの記憶に深くとどめさせるためであったと考えられる。

もう一つのことは、弟子たちのなかで祈らないで、このように彼らから離れて祈られたことである。弟子たちを祈りの場の近くに連れてこられ、祈るように命じられていながら(ルカ 22:40)、ご自分は彼らから少し離れたところで祈られた。このことは、後になって弟子たちが主の思いを理解することになるという目論みがあったのだろう。主はご自分が弟子たちとの間に隔たりがありながら、このとき、彼らが主の苦悩の意味を理解できなかつたとしても、後になって、この時の主がご自分と弟子たちの間に距離を置くことで、ご自分の公的使命に弟子たちが貢献することができないことを、信仰によって理解するときのための配慮であったのかもしれない。

しかし、このことが単に消極的な意味に過ぎないのではなく、積極的な意味を兼ね備えていたと考えられる。つまり、主は苦悩を、弟子たちに単なる模範として示すために用いたのではなく、ご自分の使命のためささげた祈りを聞かせることで、その永遠にかかわるメシアとしての業を彼らに見せておられたことを、後になって彼らが信じるようになるためであった。

「結局、『石を投げて届くほどのところ』ということに、永遠と時の法則を見るのである。つまり、それは、『アッバ父よ、耐え支配する力をあなたから与えられますが、愛の慈しみも来ます。主なる神は高くおらせられながら、低い者を尊んでくださる』ということなのである。それは石を投げて届くところに離れていた信仰者が、キリストにあって御父を見

出すことになったことの告白である」²。

3) 御使いが天からイエスに現れ、力づけた

主は弟子たちの励ましを求めておられた。少なくとも彼らが目を覚まして祈っているように期待された。しかし、その期待のようにはならず、最初のうちはそうではなかったとしても、弟子たちは眠ってしまった。そのことは対照的に、一人の天使が遣わされた。天使は神の僕として御子のもとに送られた。それは御子に仕えるためであったことが明らかにされる。信仰者は自分の窮状に仲間が関心を示さないときでも、神はその求めを聞いていて助けてくださる(ヘブライ 1:14)。

主イエスが弟子たちを三度も起こそうとされたことと対照的に、神は弟子たちをその眠りから覚まそうとはされなかつた。御子による罪人の救いは、ただ神の業であつて、人間の参加する余地のないことを教えるためなのか、人間の無能力さを示すためなのか、いずれにしても、この時の眠りに陥っていた弟子たちにどのような力もなかつたことが明らかにされている。

天使が、主イエスに現れたのは、彼に小休止を与えるためではなく、謙卑の状態にあった彼を、時が来る前にその使命を妨げられないよう、支えるためであった。主イエスはその公生涯のなかで、荒れ野で悪魔の誘惑をお受けになった時、天使が現れて助けを与えられたが、ゲッセマネの園でもこのように同じことが見られた。

II. 信仰者の祈りへの適用

キリスト者はどのような時も、主イエスが経験されたような御父との断絶を経験させられるようなことはない。この事実は信仰者を祈りへと励ますことになる。

² Ibid, p344.

弟子たちが主イエスの求めにもかかわらず、後になって、だれも目を覚ましていて主のためにとりなしの祈りをすることができなかつた。主は彼らのことを、「心は燃えていても、肉体は弱いのです」(マタイ 26:41、マルコ 14:38)と言われて、同情を示されたが、三度目には、ペトロに対して、「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です」と言われて、ご自分の苦難の歩みにとって、弟子たちからは助けを得ることができなかつたことを明らかにされた(マタイ 26:45、マルコ 14:41)。

ルカだけは、「彼らは悲しみの果てに、眠りこんでしまつてゐた」(22:45)と記している。眠り込んでしまつてゐた弟子たちが、主のゲッセマネの祈りの言葉を記すことができてゐるのは、彼らが初めから眠り込んだのではなく、途中からであったことを物語つてゐる。彼らがこの時の出来事を記すことができたのは、「初めのうちは(少なくとも30分ほどは)眠らずに祈つてゐた」³のであらう。

このゲッセマネでの祈りは、主イエスご自身にとっても弟子たちにとっても、非常な悲しみのなかでさせられた特別な祈りであった。そのことは祈る者の感情が影響することを示唆してゐる。感情の伴わない祈りはありえないものの、感情にまったく支配されることのないようとする努力も必要なことを示してゐる。

そのためには、主がなさつたように、御父から与えられている使命感が重要な意味をもつてくる。悲しみと激しい苦しみのなかで、神の御心に従うことで状況を支配する者として行動された主の姿を見るからである。このように、キリスト者は聖書によって明らかにされている神の御心を知って、生活に適用できるように備えることがその力となる。

「神に定められた苦難の道を避けたいという誘惑のなかで、彼は神の意思を受け容れています。……神の意思に従わないことを求めるのではなく、神の意思が別にあることを願つたのである。しかし、これでさえ試みと

³ N. Geldenhuys, *Commentary on the Gospel of Luke* (Eerdmans, 1951), p576.

見なされるべきであり、イエスはそれを克服された」⁴。

このように主は弟子たちにとりなしの祈りを求める、また御使いの助けを受けられたということは、祈りを共にする友の助けが大きな意味を持つことを教えてゐる。

(日本キリスト改革派名古屋教会前牧師)

⁴ I.H. Marshall, *The Gospel of Luke* (NIGTC), (Eerdmans, 1978), p831.